

朝の運動 二日目



お母さんがいなくても、お靴がちゃんとはけるよ。



迷わないようにつながって歩くんだよ。



「手のひらを太陽に…」ほら、できるよ、上手でしょ!



今井先生のそばにきたよ。先生、これでいい?



フー疲れたなあ、一休みしよう。



アイガモさんのようにつながって、お庭の隅の砂山に登ったよ。



お山の上から、みんなで「ヤッホー!



オタマジャクシを見た後、先生のお話を聞いたよ。フーン...

「おや、今日はいいですねえ。泣いている人が一人もないね」と、にこにこ顔の須崎園長先生。  
大部分の子が保育園生活初めての年少さん。何をやっていても、絵になりますね。

6月のこと

六月のある日、強風が吹き荒れている大河原峠から、北八ヶ岳の亀甲池へ向かった。竜源橋方面へ少し下ると風はおさまったが、青空はなく空一面ねずみ色におおわれ、今にも雨粒が落ちてきそうな雰囲気であった。こんな日に何を撮りに行くのかと、自問しながら歩んでいる内に無情にも雨が降ってきた。仕方なく雨具やザックカバーで完全防備して、亀甲池への道を急いだ。

だれもない亀甲池に着いたころには、ありがたいことに、雨は上がった。大量の雨水を貯えた亀甲池の南側は、岸辺まで森が迫り、その森は北横岳の稜線まで駆け上がっている。北側の岸辺近くに一本のダケカンバが存在し、風雪に耐えて生き延びた芽吹きを喜びを主張していた。

新緑はさんさんたる陽光の中で生の讃歌を謳うのも良いが、曇り空で影がなく満遍なく光がまわった時の黄緑も味わい深い。明るい未来だけを志向して生きている若者の人生観と、人生の店じまいに向かって歩んでいる中高年の人生観は当然違って当たり前のように。

「風景の感情を表現する」という途方も無い課題を意識してシャッターを切るようになったのは、哲学者大森荘蔵が一九九六年に朝日新聞に発表した文章を、数年前に知ってからである。「世界は感情的なものであり、天地有情なのである」と説く世界を求めて、道のりははるかに遠い。ダケカンバの背景、ガスの流れが激しくなってきた。三時間はあつという間に過ぎ去った。(古屋)



暮らしの中のピアノ

東高木 片山 智子



ピアノへの憧れ

「ピアノのある家」は、小さい頃からの憧れでした。ピアノが弾けたらどんなにいいだろうとずっと思っていた私です。  
長女が小学校に上がる頃、「家には贅沢かな」と思いながら買ったピアノが来たときは、本当に嬉しく幸せに思いました。長女はピアノには興味がなくがっかりでしたが、次女は近くの先生にお世話になりました。私も短い期間でしたが教えていただき、初めての発表会には緊張で手のひらは汗でびっしょり。途中で指が止まってしまい、頭の中が真っ白になったことを今も思い出します。そしてピアノはそれっきりになってしまったのでした。次女も中学、高校と

なると運動系の部活が忙しく、ピアノは単なる家具、飾りとなってしまいました。

ピアノ講座への申込み

平成十九年の秋のある朝、新聞で「大人の初級ピアノレッスン講座」があることを知って、すぐ申し込みました。講座は「グー、パー、グー、パー」と指の運動から始まり、親指は1、小指は5と番号を教えていた。だいて、テール上で指を動かす練習、その後キーボードでの練習へと進み、一回一時間のレッスンを九回受けて、十回目は小ホールでの発表会でした。自分で決めて練習してきた曲を一人ずつ発表したのですが、皆さんとても初心者とは思えない素晴らしい演奏で、自宅で一生懸命練習されたことがうかがえました。中でも、私が取り組んで

みて難しくてなかなか弾けなかった「水色のワルツ」を、全く間違えずに流れるように演奏された男性には驚きました。奥様が私の隣の席にいらしたので、「お家でたくさん練習なさったでしょう」とお聞きしたら、「つこりとうなずかれました。その時思ったのです。「繰り返し練習すればいつかは弾けるようになる。たとえ短時間でも毎日ピアノを弾こう」と。  
また、先生のおっしゃった「ピアノを弾く人は認知症になりません」の一言が、一層ピアノを続けようという思いを強くしてくれました。

短時間でも毎日ピアノを

講座終了後、一年間は公民館の施設、音楽室やピアノなどを無料で使わせていただけるといいうので、「家でもとにかく毎日ピアノに触って、一週間に一回音楽室に集まって順番にピアノを弾きましょう」と呼びかけて、始まったのが「ピアノの会」です。ピアノ教室ではないので先



ピアノの会で練習に励む

生はいませんが、他人の前で弾くとなるとある程度の緊張感もありますし、家での練習もやらないと進みません。言ってみれば、各々が生徒であり、先生でもあるのです。皆で互いに励まし合いながら、ピアノを続けていけたらいいなと思っています。

私の目標は、ベートーベンの「エリーゼのために」と、グノーの「アベマリア」を最後まで間違わずに弾くこと。果たしてその日は来るのでしょうか。